

黒い水

佐佐木邦子

袋と同じになった袋部分にそつと竹ペラを入ると、かな音をたててページが剥がれた。小さな穴が不規則にたくさん開いて、砂の粒が光る。

お、今日は素直に剥がれてくれそうだな。麻実は心なしかほつとした。今日は何にも考えたくない。作業に没頭していれば考えることから逃れられる。そのためには洋紙よりは和紙が、インクよりは墨が、とにかく単純で丈夫な方がよかった。

次のページをつかんで、ページの間に竹ペラを入れた。湿ってかびているが、やはり抵抗なく剥がれてくれる。文書のページがめくれる、という当たり前のことが、ちっとも当たり前じゃないんだと、このボランティアを始めてから思うようになった。

「市立博物館の特設コーナーに、お茶箱が展示してあるの。何の変哲もないお茶箱なんだけどね、女川町の古い民家から出たものなのよ。今度の津波で壊滅した土地。町の指定文化財だった古文書が入っていたんだって。四つあったそのお茶箱も流されて、一つだけ対岸の塚浜に打ち上げられたの。塚浜で後片付けをしていた人が見つけて、大事なもののらしいというんで、たまたま通りかかった宅配業者に役場の教育委員会まで持っていったらんだって。教育委員会も被災して、総合運動場に仮設の事務所を作って避難してたのね。職員が仕事の合間に応急処置したんだけど、手に負えないのよ。それで仙台の博物館で引き取って、さらに奈良の文化財研究所で真空凍結乾燥してもらって、また仙台に戻ってきたの。展示してあるのは、そのお茶箱。そういうのがいっぱいあるのよね」

結城さんが言ったのだ。津波の水をかぶったから、時間が経つほど扱いにくくなる。とにかく急いで修復しなければならぬ、そのためのボランティアを募集している、と言われたとき、麻実はためらわずに申し出た。結城さんはPTA仲間で、ご主人は博物館の学芸員をしている。被災地から文書を運んでくるのは別な人たちで、運び込まれたものをクリーニングするだけだとか。根気さえあれば難しい仕事ではないとも言われた。

とにかく何かしていないと落ち着けなかった。三月の震

竹ペラで慎重に剥がしていった。ページを剥がすたびに、紙には、針の先で突いたみたいな小さな穴があく。津波が引いたあとに残った塩が糊のようにくっつき、さらに時間がたつと結晶になって固まるのだ。穴は塩の結晶跡で、こぼれた塩の粒がページの間に光っている。それを刷毛で払い落とす。爪楊枝であけたような、不規則に並んだ小さな穴は、モールス信号みたいに興味ありげにも見える。見方によっては神秘的できれいだ。濡れた墨文字と赤い文字が薄い和紙に透けて、何枚も重なっているのも妙にきれいだった。人事の公文書には等級や給料を赤文字で書いてあるものが多い。

放置した時間が長びくほど始末がつかなくなるから、なるべく早く処置しておく必要があった。

災から何カ月も過ぎた。しばらくは無我夢中だったものの、ガソリンが自由に見えるようになり、ガスも水道も復旧すると、麻実の周囲は普段と全く変わらなくなってきた。

人の記憶なんてチャチなものだ。やさしさはもつとチャチかもしれない。下手すると、あの風景も遠退いてしまふ。遠退いたらグチが出る。グチがグチであるうちはまだいいが、それが本音だとなったら厄介だった。大津波の痕跡がはつきり残っているものに、日常的に触れていなければならなかった。

誘われたのが、夏休みの初めというのもよかった。学校が休みで子供たちが家にいる。長い休みは自分の子供だけだってイライラすることが多いのに、なつかないよその子供がいたら、もつとイライラする。子供だって、麻実が始末家をあけていた方が、気楽なのではないかと思った。

古文書修復がメインと聞いたが、被災文書は古文書だけではなかった。民家だけでなく、学校も役場も津波でやられた。保管されていたおびただしい文書も海水と一緒に流れ出ていた。大事なものの、大事でないもの、公的なもの、私的なもの、当事者は目の前のことに精一杯で文書まで手が回らない。一般の行政文書、学校関係の書類など、なるべく早く手を着けねばならない文書が、段ボール箱で部屋の隅に積み重ねられていた。

今やっているのは旧北上町、現在は石巻市に合併された寒川の尋常小学校の学籍簿だ。本当なら並んでいる順に端からやるべきなのだが、その近辺の土地のものが目に入る、麻実はいく手を出してしまおう。

夫の出身地、つまりアイツの出身地だ。夫の出身地についてはあまり関心を持ったことがなかった。今度の震災がなければ、いや震災があったにしても、夫がアイツを引き取るなどと言ひ出さなければ、関心など持たずにすんでいただろう。郷里を追われた夫は自分から郷里について話すことはめつたになかったし、麻実を郷里に連れていったこともなかった。

大変な田舎でね。本家とか分家とかすごいんだよ。本家の顔を潰したとかって、親父とおふくろと、ほんの子供だったおれと親子三人、石でもぶつけるようにして追い払われた。欠け皿一枚おまえらにやるものはない、郷里があるなんて思うなど叩き出された。おかげでこの街に来てからも、どれだけ苦労したことか。苦労なんてもんじゃなかった。おふくろが早死にしたのだから、そのせいみたいなものさ。親戚なんておれにはない。あんなどこ、二度と帰る場所じゃない。

そうでなくたって自分の子供だけで手一杯だった。世帯を持って夢中で暮らしているうちに二十年過ぎた。下の子の海斗が中学になったから、これまでみたいな半端仕事で役員を、祐介のためには進んで引き受けた。アイツ、どこへ行っただろう。麻実はさつきから無理に押さえていたことをまた思った。夕べ少々叱りすぎたのは確かだが、それが出てゆくほどのことか。今朝起きたらいなくなっていた。買ってやった自転車とスポーツバッグもない。夫は仕事を休んで朝早くから探しにいった。「家へ帰る」と言っていたそうだが、津波で流されて家なんかどこにもないのだ。家どころか町そのものが消えてしまった。

祐介がどこへ行っただか考えるとイライラした。夫も子供たちも、祐介が出て行ったのは麻実がひっぱっていたせいだと思っている。「おかあさんが家にいると、祐介、帰って来づらいかもよ」と大学二年の洋子が言った。「いいよ、アタシ、今日は家にいてあげるから。おかあさんはどっか行きなさい」

まだ夏休みが終わらない洋子はけつこう時間がある。自分から帰ってくるか、夫が見つけてくるか、どっちにしろ必ず電話をくれるよう言い置いて、麻実はボランティアに出た。車で二十分ほどの市内の大学だから、何かあったらすぐ戻れる。

湿ったページをめくるたびに、塩の臭いともヘドロの臭いともつかないおかしな臭いが立ちのぼった。津波の臭いだ。ページは端がめくれ上がり、ところどころに泥ともへ

はなく、そろそろフルタイムで働こうかと思っていた矢先だった。そこへ持ってきて、会ったこともない小学六年の男の子。会ったことがないどころか、夫にそんな親戚の子がいたなんてことさえ知らなかった。長い間音信不通の兄がいる、とは聞いたような気がするが。

おれだつて知らなかった、と夫は言った。夫が音信不通だったのはこの兄だけでなく、祖父、伯父、伯母、本家分家、その土地に住んでいた親戚全部だった。今回の津波で壊滅した土地のひとつである。兄夫婦とその二人の子のうち一人が亡くなった。多かれ少なかれ親戚全部が被災して、まぬがれたのは早々とよその土地に移っていた者ばかりだった。いくら夫が郷里から追い出されたも同然だつて、他に引き取り手がいないなら知らないふりを通すことはできない。夫にしてみれば甥である。祐介と聞いた。

厄介な子供だった。何でもないことで大声を上げる。すぐに黙り込む。話しかけても無視する。それでも初めは、親兄弟と祖母を一度に亡くして、気持ちが不安定になっているのだと思っていられた。だがいつまでたっても打ち解けない。

新しい学校に溶け込めないらしいので、麻実は自分から手をあげてPTAの役員になった。役員にでもなるしかなかった。役員になれば学校に出入りする機会も増え、先生とも親しくなれる。自分の子供のときは逃げていたPTAドロともつかないものがこびりついている。ピンクや黄色に染まっているのはカビだ。淡いピンクになってしまったカビは取れないが、まだ増殖中の黒いカビもある。こういうのを見逃すとどんどん増えるから、エタノールで殺菌する。ヘドロが糊になってくっついたページは、剥がすのに細心の注意が必要だった。

昭和前期の尋常小学校児童学籍簿だった。「昭和六年二月二六日大雪のため交通杜絶、公認欠席」という文字が表れた。いくら北国だつて海辺だから、雪はそう多くないと思っていた。交通が杜絶するほどの降雪とは、どんな雪なのだろう。全部のページに書いてあるわけでもないから、登校した子供もいたらしい。学校の権威はたぶん今よりもずっと大きくて、何があつても子供は学校に行くべきだとされていた時代のことだ。それでも登校できなかった子供は少なくなかった。登校した子供とできなかった子供の家の位置関係は、どんなだったのだろう。

麻実は、よく知らないその土地の様子を、頭の中に描いてみようとする。追波湾に面したリアスの浜である。今は立派な国道ができた。だが昭和初期なら。海沿いなのに山ばかりの、峠で区切られた細い道を、子供たちは群れを作つて集団で登下校していたのだろうか。

寒川の町には、津波の一月後に一度だけ夫が行った。町、と言うより、もと町だったところ、と言ったほうが正

確だろう。家も畑も港も、とにかく何にもなかった。ほとんどの建物がなくなった狭い谷あいには、廃物捨て場にしか見えなかった。暮らしの匂いを残した家財道具の破片がそこここに積まれ、山ぎわには逆さになった船の残骸が打ち上げられている。駐車場だけでなく、港にも草むらにも、ヘドロまみれの軽トラが腐ったジャガイモのようにごろ転がっていた。

仙台近くの海辺の被害も大きかったが、峠で区切られたリアスの浜はまた特別だった。もともと平地が少なく、山の間はずかな平地に、へばりつくようにして開けた土地だ。ひとつの集落が壊滅しても、後ろで支えてくれるところが無い。映画でしか知らなかった、廃墟、とはこういうものかと、初めて思った。その廃墟が、峠一つ越すごとに現れる。背筋が寒くなった。

砂漠みたいに海底の砂地が現れたそう。港から見えないのはるか遠い沖まで、黒い海底が剥き出しになった。これだけ水が引くからには大変な津波が来るかもしれない。気付いた人たちが大声で叫びたてた。動けるほどの人はみな表に飛び出し、海を見た。海なんかどこにもなかった。あったのは、延々と続く真っ平らな砂原だけ。人々が驚いている間にも、海のあつたあたりに巨大な黒い壁がそそり立った。松林のずっと上、空を覆うほどの高く長い壁が、どこまでも続いている。と思っっているうち、その巨大な壁

シともいえる。

「いくら一生懸命こいだって自転車のスピードなんてなあ。どの道走るかわからないから、とにかく現地待ってろしかないんだが」

出ていったのが今朝だ。寒川までは、まだ行き着けないだろう。途中で迷ったらますます遅くなる。中小の漁村が点在する十三浜の中でも、寒川はとりあえず付近の中心地で、震災前は石巻から定期バスだっただけだ。今はそのバスもなくなって、復旧の目途もついていない。

人もほとんどいなかった。震災から五カ月以上過ぎ、片付けは進んでいるとはいえず、港も、付随する倉庫も作業場もない。船もあらかたが流された。漁師の働く手段がないのだから、浜に人なんかいるわけがない。

祐介が一時的に身を寄せていた避難所へ行って見たが、すでに閉鎖されていた。寒川から峠ひとつ越えたところに仮設住宅ができていて、プレハブの集会所みたいなのが併設されていたから、それらしい子供を見かけたら連絡をくれるように頼んできたそう。念のために役場の仮設支所や警察の臨時派出所みたいなところへも行って見た。

明日からは麻実が行ってくれと夫は言った。麻実は驚いた。車の運転は得手ではない。ましてよく知らない土地である。

「国道、たつたつ、ただでもカーブが多くて走りにくいじ

が水煙を上げて崩れ落ちたとか。

行ったのはそれでも震災の一月後だったから、国道だけは何とか通れるようになっていた。そういう土地でも中学校は残ったし、中学校よりもっと高い場所に建てられた家も少しはあった。たつた一度行ったきりでは目の前を見るのがせいぜいで、奥の方まで気が回らなかった。

みんなは片端から仕事を片付けてゆく。どこかへ行ってしまった祐介のことを、ここで考えてみたって仕方がなかった。手元の文書に注意を集中して、麻実も指を動かさなかった。

夫が戻ってきたのは夜も遅くなってからだった。どこへ行ったかわからない。夫は疲れた顔でつぶやいた。石巻市北上町寒川。少し前まで十三浜と呼ばれていた。石巻市の中心部は高速を使えば仙台から一時間だが、数年前に合併した周辺の町村はリアスの浜の間に開けた小さな集落が多かった。十三浜もそうで、人口百人に満たないものを含めて、十三の小さな浜が点在している。電車も長距離バスも石巻中心部までは便利だが、その先はとんでもなく時間がかかった。まして津波のあとである。交通の便は震災前とは比べ物にならないほど悪い。石巻まではバスに乗るにしても、先のことを考えたら、家からずっと自転車の方がマ

やない。おまけに今は橋が落ちて通れないとか、津波でコンクリの舗装面が剥がれたとか、国道そのものがぶつぶつ切れてるわ。この間は、あなたの隣りに乗っているだけでも心細かったのに」

「おれの有給、よくよく残ってないんだよ。片付けの手伝いだ、葬式だってだいたい休んだから、出て行った甥を探すのにまた休む、つてのも……」

あなたが連れて来たんじゃないの。喉元まで出なかったが言えなかった。いくら尽くしても、こちらの気持ち全然通じない子供だった。

朝起きて、祐介がいなくて気付いたとき、ほっとした気分がなかったわけではない。ああ、これでまた親子水入らずの暮らしに戻れると思った。しかし祐介はまだ小学六年で、しかも仙台に出てきて四カ月しかたっていない。三月にあの大津波、四月末に引き取って五月の連休明けからこちらの小学校に入れた。学校に慣れないうちに夏休みが来て、今はその夏休みも終わった九月初めである。

まずほっとして、それから腹が立って、次に心配になった。その間一秒の数分の一。それにしても、まずほっとしてしまった自分の正直さが情けなかった。着替えて財布とシユラフは持ち出されていたが、小遣いがそれほどあるとは思えなかった。

出てゆくととき、自分のもののほか海斗の携帯電話を持っ

ていった。叱った原因は携帯電話だ。祐介が携帯電話が欲しいと言ったのだ。しかし小学生に携帯なんて好ましくない。「みんな持つてんだ」

祐介はうなだれて抗議した。

「みんな持って、せいぜい二、三人くらいなものですよ。家の固定電話使えばいいのよ。携帯でないと連絡取り合えない人なんて、いないじゃないの」

「おれ、前は持ってた」

町場の小学生だって、携帯なんか持っていない子供の方が多い。自分の子の海斗にだって、中学になるまで我慢させた。仙台よりずっと小さなリアスの浜で暮らしてきた祐介が、スマホとかワンセグとか言うのが気に食わなかった。スマホやワンセグなんて麻実がよく知らなかったから、自分の知らないものを当たり前のように話す子供に腹が立ったのかもしれない。

「震災孤児の養育費、もらってるくせに。カネはちゃっかりもらって、おれには何もなしかよ。おれに来る分のカネ、洋子や海斗に回ってんだべ」

思わずひっぱたいていた。祐介の公的養育費など雀の涙だ。食べさせて、学校に通わせて、着させて、あたりの子供と釣り合う程度の小遣いを与えて、将来大学へ行きたいと言えば行かせるくらいの貯金もして、となったら、わず

かな養育費など簡単に足が出てしまう。それなのにこの子は、養育費が目当てで引き取ったとも思っているのか。

どれだけ大変かわかってんの。短期間ならいざ知らず、家族以外の誰かに、デンと居座られてごらんさいよ。同じ部屋で呼吸されてりゃネコにだってイライラする。まして人の子供。だけど、そう言ったらおしまいだから、お互い我慢できるところは我慢して、わたしの方が年上だからわたしの方がたくさん我慢して、なるべく良い関係を作りましょうと思ってるのに。

ひっぱたいたこと自体は誉めたことではないが、一回だっただけでも抑えたと思う。祐介がいなくなったのは翌朝だった。海斗の携帯がなくなっているのに気付いたのは、さらにそのあと。学校に持ってゆこうとしたが、見当たらなかった。

たまたま朝食に下りてきた洋子が、探してあげると言っただけでも抑えたと思う。祐介がいなくなったのは翌朝音が鳴れば、どこにあるかわかる。しばらく待っていたが、鳴らなかった。かわりに出たのが祐介だった。

「なんだ、祐介なの。どこにいるのよ」と洋子が頓狂な声を出したら、「家へ帰る」と言って切ってしまった。夫が顔色を変えて立ち上がった。

「要するにガキなんだよ。手元の携帯が鳴ったから、盗んできたのも忘れてつい出てしまった。そういうガキを放っ

ておけない」

夫は朝食もそこそこに探しに飛び出した。県庁はまだ開いていないから、時間を見はからって途中で連絡を入れるという。夫は県庁職員である。定時出勤定時帰宅の典型みたいな公務員だが、あの震災のときは過労で倒れるんじゃないかと思うくらい働いた。死者行方不明者、被災した土地建物が一番多かったのが宮城県だ。その職員だから、手が足りなくて困っている一番ひどいところを選んで回された。ガソリンもなかったので、家から通うなんてできない。一度出たら何日も出っぱなし。あのときはみんなそうだった。

ガソリンが買えるようになっても早朝出勤、残業は当たり前、帰ってこない夜もあった。土曜日曜も出勤した。

ああいう緊急時は誰が何の仕事なんて言っていられない。土建屋まがいのことから病院の手伝い、交通処理、離れた所にある避難所の入所者管理まで、回された先で、何でもやっていったようだ。

被災した誰がどこにいるか、なんてことも、しばらくわかりようがなかった。震災後三週間ばかりして、石巻市の病院で、知っている名前を見かけたのだそうだ。とにかく惨状、テレビや新聞で報じられているニュースとはまるで違う。テレビの画像なんかで伝えられるのは事実のほんの何分の一かだ。いくら想像力をたくましくしてみたって、

テレビや新聞でわかることなどタカが知れている。

想像をはるかに超えた惨状を毎日目の前にして、夫の経も善段とは違っていた。思い出したくない名前だ、なんて言っていられない。当たって見たらやはり伯母だった。喧嘩別れ、というか親の仇、しかも出会ったのは数十年ぶって容態が悪化したものの、気力で持ちこたえていた。

名前を告げたら思い出して、思い出したとたん涙をポロポロ流してすがりついてきたという。石をぶつけるようにして郷里から追い出された、なんて話は、もちろんしなかった。夫はそのとき持っていたお金を渡し、住所と電話番号を教えて別れた。

亡くなったと連絡が来たのは、それから十日ほど後である。病院の関係者に、夫の名前をくどいくらい繰り返していたそうだ。彼女は入院していて助かったが、息子夫婦とその長男が津波の犠牲になった。もう一人孫がいて、彼女は孫が心配で死ぬに死ねなかったらしいのだ。それが祐介だった。

彼女だって、津波がなかったら死なずにすんでいただろう。入院先の病院が津波でやられ、別の病院に搬送された。カルテは流され、薬も十分ない。夫の伯母のような間接的犠牲者も多い。

「すまない。麻実には面倒かけるかもしれないが、おれが

育てるしかないようだから」

郷里のことは全く忘れてと言いながら、夫は最初の子供が生まれると洋子と名付けた。太平洋の洋である。二番目の子は海斗。心の中では海を忘れられなかった。そういう夫と暮らしてきたのだから、仕方がなかった。麻実だって、それなりに覚悟は決めたのだ。

「休みがよくよく残ってないんだ。おれより大変な奴でも、無理して仕事には出てるんだから」

伯母の一家だけでなく、寒川在住の親戚全員のことを夫が調べねばならなかった。震災以降、職員が休暇を取るのには極端に難しくなっていた。安否確認から始まって死んだ者には死亡手続き、全壊した家には撤去手続き、半壊ならばボランティア申込み、さらに葬儀や瓦礫の片付けなど、公の業務として出来ないところは、取りにくい休暇を無理に取って個人でやるしかなかった。おまけに今日も休んでいる。言われなかったって、夫の公休はもうほとんどない。

次の日、麻実は不安な道を自分で運転して寒川へ行った。石巻河南インターまでは三陸自動車道、下りてしばらく県道を走り、やがて国道398号になった。県道から国道に変わる近くには、今回の津波で大惨事を呈した大川小学校がある。今まで大きな津波なんか来たこともない土地だった。海も見えないし、その小学校自体が何かあった場

道路はでこぼこ穴だらけ、ところどころ舗装のコンクリートが剥がれている。道路の一部になったコンクリートが剥がれるほどの波の力だ。建物から壁や柱がもぎ取られても、不思議はなかった。

集落をひとつ通るたびに、体から力が削ぎ落ちてゆく気がした。土地に馴染みのない自分でもそうなのだから、生まれ育った祐介はどんなだろうと思う。こんな風景を見ながら自転車をこいでいる小学生を思い浮かべると、たかが携帯で叱った自分が情けなくなる。

寒川も酷かった。港が大きかったから町場も賑やかで、学校や郵便局や民宿や大きな店があった。それが、ひとつもなくなっている。夫の生家、つまり祐介の生家は雑貨屋を兼ねた古くからの網元で、付近の草分け的な一族だ。祐介だって、それなりにいいところの坊ちゃんだった。

ほとんどの建物がなくなってしまった集落は、いやにちんまりと小さく見えた。少し高台にある小学校の校舎が、ガラスがなくなった窓をさらして、残骸のように残っていた。

夫が昨日頼んでおいたという集会所や派出所へ行ってみたが、目新しいことはなかった。

夫に探せなかったものが麻実を探せるとも思えなかったが、とりあえず寒川の港に座って、一日海でも見ているしかなかった。こういうものは相手が出てこようと思わない

合の緊急避難所に指定されていた。二時四十六分に大地震が来たが、その後津波に襲われるなんて誰も考えていなかった。まして先生方は土地っ子ではない。

先生に引率された子供たちが動き出したときはすでに遅くて、津波が北上川を一気に遡った。船や車や建物を巻き込んだ黒い水が、音を立てて川を上ってくる。いくら走っても追いつかれ、児童の七割が死亡、助かった先生は一人だけだった。

五カ月過ぎた今も、北上川の反対側に、鉄骨を剥き出しにして校舎が立っている。さらに進むと石巻市の北上総合支所で、赤錆びた高い鉄骨の間から壁材がビラビラと風に泳いでいた。まだ建設されて間もない新しい建物で、ここも付近の指定避難所だった。想定された最大の津波が五・五メートル、それに万一の用心分を加えて海拔六・五メートルの場所に建てられた。おまけに目の前には高い堤防がある。津波はその堤防を越えてなだれ込み、最新の設備を備えた総合支所は一瞬で廃墟に変わった。生存者は三人だけだった。

支所の後ろに中学校の校舎が残っていた。こちらも骨だけだが、手前にあった総合支所の建物に遮られて、津波の勢いが少し弱まった。こちらに避難した人たちは、三階に逃げて助かった者が多いという。どちらの建物に逃げたかで生死が分かれた。

かぎり、探せないものだ。だいいち祐介は寒川に着いたのかどうか。「家へ帰る」と言っていたって、家そのものが流されているのは、祐介だって十分に知っているだろう。山と山の間を開けた静かできれいな集落だったが、集落全部がなくなっている。もとの姿とは似ても似つかない。

夜、家へ戻ったら留守電が入っていた。同じクラスのPTA役員である吉沢さんからだった。夏休みが終わって二週間になる。小学校はそろそろ学芸会の準備に入り、PTA役員も手伝うことになっていた。この後たびたび寒川へ出かけることになるから、あまり手伝えないと断りを入れておく必要があった。

「家の子から聞いたんだけど、昨日も一昨日も、祐介くん、欠席だったんですってね。それで電話してみたんだけど」

留守にしていたことを謝ろうとしたら、吉沢さんの方から言った。PTA役員は各クラス二人ずつだから、役員同士自然に親しくなる。祐介を引き取るようになった経緯は吉沢さんには話していた。祐介が無口なだけに、吉沢さんが教えてくれる学校での出来事は貴重だった。

「祐介くん、喧嘩したんだってよ」

「喧嘩？」

「転校生に殴られたんだって。一発軽く殴られたらしいん

だけどね、殴られた量に不釣り合いなくらいいっぱい殴り返したって。それで大喧嘩になって、誰かが職員室の先生を呼びに行つて、ようやく収まったんですって。相手の子、鼻血出して、制服が血だらけになっちゃったとかって」

麻実は溜息をついた。厄介な子供ではあるけれど、今までは喧嘩してきたことはなかった。それとも麻実が知らなかっただけなのか。

「先に手を出したのは、相手の子の方なのね」

「まあ、そうなんだけどねえ」

吉沢さんの話は歯切れが悪かった。二学期が始まって間もなく、福島県の飯館村から転校してきた子供、だそうだ。

ここ半年は小学校も中学校も転校生が多く、クラスに転校生が三、四人いるところも珍しくない。転校生を異分子として、排除して面白がるのも珍しいことではなかった。その子供が転校してくるまでは、祐介が転校生と呼ばれていた。

原発から避難してきた子供だった。父親は仕事があるので飯館村に残り、母親と小学生の子供二人が仙台のアパートで暮らしている。転校生がやってきたとき、先生は彼の境遇をみんなに説明し、仲良くするよう言った。だが間もなく原発菌とかいう遊びがはやり出した。その転校生の手が触れたところを「ゲンパツキン、ゲンパツキン」とはや

すのだそうだ。

麻実は眉をしかめた。そういうの、最低だと思う。

「止める子供、いなかったの？」

「はやされる子って特徴あるのよね。大きな声じゃ言えないけど、なんかのろくさくて、福島県の元の学校にいたっていいじめられそうなタイプ」

「うちの祐介がはじめた、ってわけなの？」

「そうでもないみたい。そういうこと、中心になってやりたがる子って、いるじゃない。尻馬に乗って騒ぐ子と、心になってやりたがる子。祐介くんはどっちでもなくて、ただそばで見えていただけみたいなの。それなのに、その子いきなり祐介くん殴りかかったんだって。で、祐介くんも殴って、あとは手が付けられなくなったんですって」

どうもよくわからない。教えてくれた吉沢さんにしたって、子供から聞いたことを話しているだけだ。どんくさいと思われていた子が、いきなり別な子供を殴ったから、怒らせると怖い奴だとあたりから見直された。だが翌日から祐介が学校へ行かなくなった。気にしたのか、その転校生も祐介が休んだ次の日から行かなくなってしまった。と言っても、まだ三日目だけだ。

先生も心配しているらしい。祐介については先生にも話してある。祐介にしろ、福島飯館村の子供にしろ、震災の傷を抱えた子供をどう扱うかは、学校としても大きな問

題なのだ。先生が話すよりも吉沢さんから話してもらった方がいいと、先生は判断したらしい。

ああ、それにしても、と麻実は溜息をついた。話がどんどん大きくなる。携帯くらい、買ってやるべきなのかもしれない。麻実世代の携帯と、祐介世代の携帯とは、必要度がまるで違うのかもしれない。一般の町場の子供には好ましくない、ということが、壊滅した海辺から来た子供にも当てはまるものかどうか。

吉沢さんの電話が終わって、麻実は祐介に電話をかけた。考えてみれば、祐介が海斗の携帯を持ち出したのは良いことだった。祐介と連絡が取れる唯一の方法が携帯だった。

「あなた今どこにいるの。叱らないから教えて。家へ帰ると言っていたから、昨日も今日も寒川へ行ったのよ」

相手が出た。確認もせずに麻実は一気に言い、言っただん電話が切れた。

「もしもし、もしもし……」

どこにもつながっていない携帯を握って、麻実はしばらくじっとしていた。

翌日も早朝から寒川へ行った。泊まりがけで探そうにも現地には泊まれる場所なんてないから、毎日仙台の家に戻ってくるよりない。

麻実は船着き場だったところにしゃがみこんで海を見ていた。何気なくすくった砂が、指の間からサラサラこぼれ落ちた。あれから半年もたっていないのに、コンクリの上に砂は溜まる、というのが、妙におかしい。

白い波頭が風に光った。かもめが舞う。青い空、青い海、白い雲。腹が立つほどきれいで、おだやかだ。「静かな海」とタイトルをつけたら、そっくり観光用絵葉書として通用するのではないかと思うほど静かで美しい。

だが振り返れば壊滅した町だ。はじめてこの浜に来たときから見たら、ずいぶん片付いてはいる。だがそれだけだ。片付いたように見えるのは、瓦礫が一箇所にとめられただけ。住む家を失った人々は遠くへ行ってしまった。

あのときはまだ中学校の校舎が避難所になっていた。高台にあった小学校はやられたが、もっと高いところにあった中学校は無事だった。迎えに行つたとき祐介もそこで暮らしていた。今は避難所は閉鎖され、本来の中学の授業がなされている。もともと校舎の補修は継続中で、生徒もだいぶ減ってしまった。遠くの仮設住宅に引越した中学生は、以前の倍以上の時間をかけて通ってくる。峠を越えて臨時のスクールバスが走っていた。

あのとき避難所というところに初めて入った。入ってゆくと同時に何かを期待するような目が一斉に突き刺さり、すぐにそらされた。無気力ともエネルギーもつかない

い異様な雰囲気だった。臭いでもない、人の動きのなさでもない、無気力とエネルギーシユではまるで違うのに、極端と極端が隣り合って、息をひそめているような息苦しさがかった。

「津波の瞬間のことを夢に見るみたいで、ときどき夜中に大声をあげるんですよ。昼間は気丈にしていますが、夢まではセーブしきれない。すぐ前が海だからね。見たくないって、見ないで暮らすなんて出来ないんです。これが祐介の全財産。支援物資でもらった服とか靴とかあるから、けっこう持つてるでしょ。あ、このシユラフも支援物資。

あつちの受け付けで退所の手続きしてってください。そんなに、祐介。叔父さん叔母さんの言うこと聞いて、真面目に勉強すんだぞ。おまえが真面目に勉強することが、死んだ父ちゃん母ちゃんに、一番の供養なんだから」

避難所のもとめ役だとかいう初老の男が早口で言った。他の人の迷惑になっています、とは言わなかったが、言外に感じられた。

夫と石巻の病院で伯母の死を確認し、その後すぐに病院から告げられた寒川の避難所へ行った。広い体育館の半分ほどは毛布が敷いてある。マット運動に使うマットを敷いている人はまだ良い方だ。毛布一枚分が一人の生活スペースで、服やらタオルやら茶碗やらが、頭のところを整然と重ねてあった。これでも人数はかなり減ったのだ、と、ま

の。全部水没して水の中。港から離れた町場まで、和賀屋も食堂も郵便局も全部。

初めは向こうの民宿だけは見えたのしゃ。民宿の伊藤屋、あそこ三階建てで、しかも高台だから、山まで走るの間に合わない人が、何人もそこへ走りこむのが見えた。んだけど次の瞬間、そういう人たち、みんな見えなくなった。真っ黒い水が伊藤屋の屋上にもかぶさっていったんだから。さっきまでいた保育所も湖みたくなくなって、子供迎えに来た人たちの車が、次々浮き上がって流されてくの。車どうしぶつかってガソリンこぼれて、別な車は人が乗ったままま沈んでしゃ……」

近くにいた人が喋っていた。話し出すと止まらないのか、唇の端に泡を浮かせ、声をつまらせて一気に喋る。目が定まっていなかった。結局その孫は助からなかった。誰にでも同じことを話すのだそうだ。この人の頭の中はまだ三月十一日のままなのかと思ったら、怖かった。津波で流されたという壊れた車が、避難所からも、いたるところに見えた。

「祐介、こっち来い」

まとも役さんが呼んだが、祐介は動かなかった。麻実は立ち上がって近付いた。どうしたらいいかわからなかった。ただ抱き締めた。ぎゅっと力を入れると、骨がないようにぐにゃぐにゃ揺れた。自分の骨で自分の体を支える

とめ役さんは言った。

祐介は毛布の上に広げたシユラフに、膝を抱えてぼうつと座っていた。最後の身寄りだった祖母が昨日死んだ、ということがわかってしまっているのかいなのか。何も見ていない、感情をなくしてしまっただような目だった。何人かの人が集まってきた。親戚ならば面倒見るのが当たり前、と頭から決めてかかっているようで、考えさせてくれ、なんて言える雰囲気ではなかった。というより、どういうわけか、考えさせてくれ、なんて言おうと思わなかった。あんまり凄まじい風景を見て、麻実の神経も普通でなくなっていたのだと思う。

「わたし、孫んこと迎えに保育所へ行ってたの。孫と手つないで、ひよつと見たら、岬の先つちよにあった高い堤防が、真っ黒い波に呑み込まれてんのしゃ。カキ剥き場とか倉庫とか並んでるあたりでは、至る所で噴水みたく水が噴き出していた。そのうち一氣に水かさが増して、そこいらの人みんな、とにかく、どこでもいいから高いところ向けて走ってくるの。わたしも、ここでは駄目だと思って、孫の手ついで学校の裏山に逃げたわさ。石の階段駆け上がってる途中にも、バギバギツバギバギツツ気味悪い音が聞こえてくんのよ。石段のちよつと平らになつてるところで、孫がころびそうになって『ばあちゃん、ばあちゃん』って呼ぶからね。振り返ったら、浜近くにあった建物、何も見えない

ものだ、などということも、忘れてるように見えた。髪の毛の臭いがした。風呂に入っていないのだ。

「このまま連れて帰ります」
夫が言った。

「責任持つて育てます。うちに子供、二人いるんです。二人も三人も同じようなものですから」

よかった、よかったとみんな言った。そのうち祐介の担任だったという先生まで来て「よかった」を連発する。面倒みてやらねばならないのが一人減ってよかった。おかしな声を出すのがいなくなってよかった。うつつうしいのが減ってよかった。

みんな不親切だったわけではない。自分があんまり重たいものを抱えているから、ほんのちよつとでも軽くなりたいのだ。余分な重みが増したら、加わった重みごと沈んでしまいうようになっていく。麻実もうなずいた。夫以外の身内が本当にいないのか、なんてことを考える余裕はなかった。

立たせようとしたが祐介は立てなかった。夫が抱えるようにして何とか立たせ、危なっかしい足取りで車の方へ連れてゆくのをしながら、麻実は大急ぎで祐介の荷物をまとめた。

学校の先生だという人が丁寧に頭を下げた。
「よろしくお願いします。ほんとに素直な良い子なんです

よ。これで祐介のことは安心できます」

安心できない子供は他に何人もいるらしかった。震災のあった三月十一日は小学校の卒業式で、全校午前中でおしまいだった。当時五年生だった祐介も帰宅していた。地震で家の中がメチャメチャになり、その興奮が冷めないうちに大津波警報だ。祐介は母親と一緒に逃げた。海ぎわにそり立った巨大な黒い壁が音を立てて崩れ、水しぶきをあげて流れ込んでくる。高いところ高いところ、細くて急な道を必死で走った。だが普段の道と地震直後の道はまるで違う。地割れができ、浮き玉や枯れ枝が散乱している道は、速くは走れない。

追ってくる水がすぐ後ろに見えた。公民館の裏あたりで追いつかれそうになり、母親はそばの松の木に祐介を押し上げた。今どきの子供は木登りに慣れていない。一番下の枝につかまり、もつと登ろうとしている間に波が来た。

V字に入り込んだ陸の形に沿って、水が火のようにめらめら駆け上がった。風に煽られた火事の火が、ふれるすべてのものを片端から焼き尽くすのに似ていた。木も家も船もトラックも通り筋でぶつかったすべてを呑み込んで、バギバギツバギバギツと音をたてながら、濁流になって陸を上ってきた。呑み込まれたものが水圧で潰される音だった。見る間に水は、祐介が登っていた松の木のところまで来た。波しぶきが頭からかぶさった。下から支えていた母親

の手が離れた。真っ黒い水が母親を絡め取った。

「その手、絶対離すんじゃないよ」
それが祐介の聞いた母親の最後の声だった。祐介はそれからのことはよく覚えていない。大きな津波は三度来た。山の上でかろうじて一夜を過ごした人が、水が引いた朝になって下りてきたとき、木にしがみついて失神している祐介を見つけた。薄い粉雪が降っていた。凍死してもおかしくない状態だった。

数日後、母親は遺体で発見された。片腕がなかったそう

だ。
「ちょっとでも上へ、一センチでも上へ、子供をとにかく押し上げなければならぬ、必死だったんでしょ。腕が伸びきっていて、そこを津波でやられた」

麻実は絶句した。生身の体から腕をちぎり取るほど強い波の力というものが、想像できなかった。だが先生は首を振った。津波の死で一番多いのは溺死だけれど、打撲死も少なくないそうだ。水が壁のようにそりたつたのだから、崩れる激しさだって大変なものだ。

「遺体なんて見られたものじゃないですよ。水を吸ってばんばんに膨らんだり、紫色の痣で体の半分が埋まっていた。手足が付いてないのだから。一人の人が二人に数えられて、別々に葬式出された例だってあるんですから。私の親戚でも……」

その「あのとき」が、同じ県内なのに、五カ月の間に、寒川と仙台とは大きく違ってしまっていた。

胴体から脚がもぎとられ、それぞれが違う場所で発見された。遺族はどんな姿でも遺体が見つかってほしいと思っているから、脚だけだつて見つからないよりはいい。偶然見つかった脚を身内だと思つて葬式を出した。
損傷した遺体について、先生は「こんなこともあった」としか言わなかった。自分のよく知った人だから、一般論としてしか話せないのだ。瓦礫の下から発見された遺体がこの誰かを確認するのに、遺族でさえも着衣や歯形を見ないとわからなかった。服の中からスポツと抜けて裸になった遺体は、もつとひどい。遺族の気持ちが悪われて、具体的なこととはとても口に出せないのだ。

祐介の父と兄は海で別々に見つかった。発見された場所が海ということだけで、亡くなったのがどこなのかはわからない。

祐介が特別なものではなかった。家族全員を一度に失った者こそ少なかったが、親を亡くした子供や子供を亡くした親はそれこそどこにでもいたのだ。「亡くなった」とわかるだけでもマシなくらいだった。

石巻だけではない。岩手、宮城、福島、海に面しているところ、ほとんど余すところなくそうだった。

洋子も海斗も、新しい兄弟を黙って受け入れた。子供たちだつて、あのときはただごとではないと感じていた。あのときは

携帯の電池はすぐになくなる。祐介が充電に困るかもしれないという心配はあったが、朝晩二度くらいならかまわないだろう。答があるうとなかろうと、呼びかけているしかなかつた。少し話すと相手は黙って切ってしまう。麻実からだど知っていて、少なくとも初めの数言は聞いているのだ。それだけでも良しとしなければならぬ。
「どこにいるの。帰っておいで。帰れないくらい遠くへ行つてしまったんなら、せめて寒川の港で待つてよ」

祐介がいなくなつて六日目の朝、麻実はいつものように電話にささやいた。返事があるなどと思っていなかった。しかし相手が出た。まるで知らない、落ち着いた男の声である。
「こちら、松島交番です」

「え？」

麻実の戸惑いを察したように、男は手短かに説明した。国道45号線沿い、松島町の交番だそうだ。昨日、遺失物として届けられたという。拾った場所は近所のコンビニ、届けたのは高校生の女の子。コンビニの前に落ちていたのを見つけて、何気なくカバンに入れた。部活の時間があつて

急いでいたそう。帰りに届けようと思ったのだが、部活に熱中しているうちに忘れてしまった。思い出したのは翌日、それから届けなければ、拾ってから丸一日が過ぎていた。

「拾ったというと……じゃ、あの子、捨てたんでしょか？ わたしの電話がうるさくて、捨ててしまったんでしょか」

思わず叫んでいた。叫ぶと同時に、寒川の壊滅した町が頭の中にパッと広がった。思い出すまいとしても、いやでも思い出される。あれだけのものを見てきた子だ。神経が少しくらいおかしくなっても不思議じゃない。携帯が欲しいなんて、やっぱり口実だ。なんでもいい、誰かに突っかかりでもしないと、どうしていいかわからないのだ。突っかかって、自分の方を向かせておいて、あげくに煩わしいとか、ほっといてくれとか、自分で自分を抜いかねている。八つ当たりする相手だって、いないよりはいた方がいいだろう。親にはなれなくとも、八つ当たりを受け止めてやるくらいは出来る。

「落としたんじゃないですか。拾われた場所が場所ですから。捨てたのと落としたのでは、だいぶ違いますよ」

電話の向こうで、おまわりさんはおだやかに言った。そうかもしれない、と麻実も思った。捨てたのではなく落としたのだとしたら、祐介はもっと困っているだろう。「これから行きます。交通渋滞に引つかからなければ一時

間くらいで行けるかと思えます」
待っています、とおまわりさんは答えてくれた。麻実はすぐに車を飛ばした。国道沿いの目立つ交番だった。すぐにはわかった。

交番に届けられたのが昨日で、拾われたのが一昨日。祐介がこの道を通ったのは、仙台を出て四日後ということなのだろうか。車だったら一時間前後の道を、祐介は迷い迷い四日かけてここまで来たのだろうか。九月初めで、暑いのが幸いだった。どこで寝たのかは知らないが、シユラフがあればそう困ることはなかったらう。

しかし四日は長すぎる。
「いや、落としたその日に、すぐ拾われたとは限りませんから。何日も誰にも気付かれなかったということもあり得る」

おまわりさんは言い、麻実の目の前で携帯を開いて、発信履歴を調べた。家を出てから四日の間に祐介がかけた電話だ。意外に少ない。電話番号なんて、メモしておかなかつたらすぐ忘れる。忘れた番号が多いのか、震災以降変わっている番号が多いのか。ほとんどが石巻の市外局番だが、仙台のも一つあった。

おまわりさんは麻実の話をしていねいに聞き、そういふことだったら途中の交番の全部に連絡を取りましょうと言ってくれた。松島交番のあるところから寒川までの、大きい

のも小さいのも通れそうな道を全部調べ、再開したコンビニや、子供が一休みできそうな場所も教えてくれた。寒川の小学校はもうないが、別な学校に間借りして授業が行われていた。もともとが小さな小学校だから、先生方は担任でなくても児童についてはおおよそ知っている。できれば先生にも頼んでおきましょう、とも。先生の一人くらいに連絡がつけば、あとは先生どうして連絡を回してくれる。

先生方は地域とくっついているから、別の土地に移ったにしても、地域の人については案外詳しい。ついでに、もと寒川在住で今もときどきは寒川に行っている人がいたら、そういう子供に気を付けてもらえるように頼んでおきましょう。

「この携帯、こちらで預かっておいた方がいいですよ。落としたとすれば、困って探すかもしれないし、気の利いた子供だったら交番に行くかもしれない。ここまで来なかったって、交番ならどこでも遺失物は取り扱います」

おまわりさんが言った。この交番は、寒川と仙台の麻実の家の、距離にすれば三分の一くらいだ。ここまで四日だったら、最大限かかってあと七、八日。もしかしたら明日にでもつかまえられるかもしれない。麻実は何度も何度も頭を下げた。おまわりさんから後光が差しているように思えた。

麻実はその日も、次の日も、その次の日も寒川へ行った。数日はすぐに過ぎた。甘かった、と思い知らされた。何日たっても祐介は現れない。親切なおまわりさんのいる交番へ何度か電話してみたが、交番でもわかったことはなかった。

仙台から石巻までの主要道路沿いは震災前の風景がほぼ復活したが、その先は三月十一日のままなのだ。知っている道を走ってきた祐介は、石巻の中心部を過ぎたとたん異次元に入り込んでしまったのかもしれない。まるで知らない道を、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしているうちにますますわからなくなる。夫も、時間の都合のつくかぎり探し回った。おもな道だけでなく、おまわりさんから教わった小さな裏道も探した。携帯の発信履歴をメモしてきていたので、それを手掛かりに聞いてもみた。だがどこを探してもわからない。祐介は異次元へ吸い込まれたように、ポツと消えてしまった。

しばらくは熱心に寒川通いを続けていたが、麻実も、あまりの手応えのなさに疲れきった。

分厚い学籍簿は湿ってカビがはえていた。変哲もない黒い厚表紙に、薄い紙が貼つてある。「大正元年〜同十五年」

とそろそろ読んで読める。麻実はまだ文書修復のボランティアに通い始めた。

表紙と、それに続くページが一番汚れている。薄い和紙が表紙にくっついてなかなか剥がれない。一度津波をかぶった文書は、時間がたつてもきれいに乾くということがなかった。

湿った学簿は不用意に扱うともっと破けてしまいそうだった。こびりついた泥を刷毛と竹ペラでいねいにこそげ落とす。泥といつても乾いたヘドロである。なかなか落ちない泥を落とせる分だけ落とし、エタノールで殺菌して次のページに移る。

今朝出て来たら、段ボール箱が廊下にドンと積み上げられていた。麻実が休んでいた数日の間にも、新しい被災文書が運び込まれていた。北上川の流域だけでも際限なくありそうだった。

「麻実さん、それ終わったら、こつちを手伝って欲しいんだけど」

結城さんが声をかけてきた。結城さんは古文書も読める。麻実と違って頻繁に通ってきているから、仕事も手早くできれいだ。

「ごめん。これ、もうちょっと掛かりそうなの」

「いつまで掛かっているのよ。丁寧すぎるんじゃない」

「だって……」

たかわからない。イライラしているよりは、時間さえあれば確実に終わる文書修復のほうがずっとよかった。人の役に立っている、という充足感もある。

「今日の午後、また古文書が来るんですって。今度のは民家から出た掛け軸がメインだって」

「やっと減ったと思ったのにね」

「なくなっただけで、新しく入ってくるんだから。いつまでかかるんだろ」

「博物館にも美術館にも、スペースのあるところみんな、被災資料、被災民具、とにかく集まっているらしいわ」

結城さんたちが向こうの方で話している。聞くともなく聞きながら、麻実は黙々と手だけを動かしている。そうだが、仙台って集まりやすいところなのだと改めて思う。

地元で手に負えない被災文書類はとりあえず仙台に運ばれる。岩手・宮城・福島は大惨事で、三県からの人の流出は膨大だったが、仙台の人口は増えた。被災した人、仕事をなくした人、行き場を失った人たちが、とりあえず仙台へ集まるのだ。仙台は東北地方の宮城県の中にあるから、仙台で踏ん張っているかぎり郷里からすっかり切れてしまふことはないと思っていられる。三陸のリアスの浜で家族を亡くした小学生も、原発で住むところを失った飯館の母親も。いや麻実の夫みたいな、郷里から石で追われた一昔前の男たちだって。

欄外に押印して「一文字訂正」などと几帳面な文字で書いてみると、手が止まってしまふ。これを書いた人は一文書でも大事にしていたのに、肝心の本文が流れて読めない。紙はそのままあるのに、文字だけが剥がれて流れてしまった。書かれた文字が、物が流れるように流れるなんて、考えたこともなかった。

ガリ版もなかったころの学校文書はとても丁寧だ。細かな文字で一人一人の子供についてびっしり書き込まれているのを見ると、先生たちが子供をどんなふうに使っていたかが感じられて、適当に済ますなんてできない。

たぶん今の先生たちだって同じだろう。たくさんの他人の子供を親身になって世話した人がいる、それもおびたらしい数で。田舎の小学校訓導、などという人たちが、さほど給料を取っていたとは思えなかった。ほとんど無名のおびたらしい訓導たちが、たまたま自分が受け持ったもつとおびただしい子供たちと、かけがえない関係を結んでいた。その関係の結び方が、文書に記された文字だ。たった一人の子供を持て余している麻実には、とんでもなく貴重なものを感じる。

麻実は初心者だから、慣れていない分だけ時間がかかる。でもボランティアだから、能率が上がらないのが悪い、なんて文句は言われない。

何かしていないと落ち着けなかった。祐介はどこへ行っ

どうして飯館から来た転校生は、そばで見ただけの祐介に殴りかかったのか。そうして祐介は、殴られたのが一発だけなのに、どうしてそんなに滅茶苦茶に殴りつけたのか。

仙台というのは集まりやすい街だ。被災地の文書が集まり、ツアアのボランティアだつてとりあえず仙台に集まり、それから各地に散る。人が集まり、物が集まり、情報が集まり、哀しみが集まり、失望が集まり、嫉妬が集まり、イライラが集まる。飯館の転校生は祐介が宮城の被災者だから殴ったのかもしれない。同じ被災地でも、宮城はとりあえず一段落したけれど、原発の災害は先が見えない。祐介は、殴った相手が、被災者ではあつても両親がちゃんといふことにカッとしたのかもしれない。

そういうことばかり思っていたら、味気なさ過ぎて、ひからびてしまふ。携帯くらい買ってあげるから。うちの子じゃなくてもいいから。「おかあさん」と呼べないのなら、呼ばなくなつていいから。夫は明日も明後日も寒川へ行って欲しいような口ぶりだったが、空振りとはわかっていて毎日通うのは辛かった。

九月もそろそろ終わりにさしかかっていた。祐介が出ていったときは暑かったのに、もう上着が欲しい季節だ。三週間近く過ぎようとしている。アイツはどうしているのだ

ろう。お金だって、残っているとは思えなかった。

祐介は本当に寒川へ行ったのか、と、ふと思った。携帯が届けられたのが松島だ。考えてみれば、仙台から松島まで四日かかった、ということからしておかしい。親切なおまわりさんがいた松島の交番まで、仙台から二十数キロだ。いくら小学生だって、いくら自転車だって、仙台から松島まで四日もかかるということが、あるだろうか。

行く途中で落としたのではなく、もしかしたら帰り道で落としたのかもしれない。どこかへ行って、戻ってくる途中だった。そう考えれば、四日というのは納得できる。寒川まで行って戻ったとは思えないから、途中のどこか、たとえば石巻市街地を過ぎた北東あたりでUターンすれば、ちょうど合う日数だった。

風景がいきなり異次元に変わっているのは寒川ばかりではない。三月十一日のまま時間が止まってしまった土地は、仙台を中心に思い浮かべてみても、恐ろしいほどどこにもあった。それこそ、どこにでも。

それらの風景の一つに出会って、祐介は、足がすくんでそれ以上は行けなくなっただのかもしれない。進めなかったら戻るしかない。しかし、どこへ。

麻実は改めて、携帯の発信履歴の中に仙台の市外局番があったことを思い出した。二度ほどかけてみたが誰も出なかった。三度めにかけてとき、くたびれた声の女の人が出

て、そういう子供は知らないと言った。他の番号ははばかりしい結果がなかったから、初めからあんまり期待していなかった。突っ込んで尋ねてみる気にもなれず、そのまま電話を切ってしまった。

だがもしかして——こちらの聞き方が悪かったのかもしれない。いきなり「武山祐介を知りませんか」なんて言われたら、相手だって戸惑ったかもしれない。急に思い付いてハッとした。夜も遅かった。よく知らない家に電話するのに適当な時間を過ぎていたけれど、かまっていられなかった。この前の女の人が出た。やっぱり疲れた声をしていった。

「村田です」

相手は名乗った。麻実は以前にも電話した者だが、と前置きして、自分と祐介の関係を手短かに説明し、祐介のような子供を本当に知らないのかと聞いた。何でもいいから思い出して欲しい。少なくとも祐介の方では自宅の電話番号を知っていた。どこかで会ったことはないか、あなたが知らなくても子供さんは知っているかもしれない、お宅に子供さんはいないのか。早口で尋ねた。電話の向こうで相手は首を傾げたらしかった。

少し時間を置いて、村田さんは考え考え息子のクラスメイトかもしれないと言った。村田さんは昼間は働いていて家にいない。二重にパートを掛け持ちしないと暮らせない

ので、ほとんど外に出っぱなし。子供の友達関係もよく知らない。気にしないというより、子供の話をゆっくり聞いている時間もないという。

「とにかくお金がないんですよ。主人からの仕送りだって、あの人の仕事があまくゆかなくなっただけから、こっちに送るほどないし。パートとパートをつないで走り回ります。おかげで転校先の先生にもご無沙汰しっぱなしで」

村田さんはくたびれた声でいった。福島県の飯舘から転校してきた母子だった。小六の息子と小三の娘がいるそうだ。

「じゃ、しばらく前に祐介と喧嘩したというのは……」

「え？」

そういうことも村田さんは知らなかった。子供たちが転校先の学校でどんな生活を送っているかなんて、最初の一週間くらいは心配だったけれど、その後は気にしたことがない。気にしない、というより、一日一日を暮らしてゆくのに手一杯で、ほかのことまで気が回らない。細いレールの上を、足を踏みはずさないようにバランスを取って、ようやく歩いているようなものだ。

ある日、仕事を終えて家に帰ると、朝に用意していったはずの冷蔵庫のおかずがなくなっていた。子供たちに聞いてみたら、息子が、友達に来て、おなかがいっていたので食べさせたと答えた。その子供は、村田さんがいない時間

帯にその後もたびたび来ているようだった。ごはんを食べたり、泊まっていたりすることもあった。留守中に自分の子供がよその子供にごはんを食べさせるのは、あまり気分のいいものではない。でもこの辺はそういうことが不自然でない土地柄なのかと、気にすることもなかった。

「その子供、名前を呼んだりはしなかったんですか」

「さあ、わたしが会ったことは、ほとんどないもので。泊まった朝なんかでも、わたしは子供たちが寝ている間に働きに出てしまうんで、顔は合わせません。津波でおうち流された子だよ、と言ってました。とても親しい口ぶりでした。その友達が来るようになって、うちの子もいくらか元気になりました。わたし知らなかったんですが、うちの子学校もたびたび休んでいたらしいんです。今も、必ずしも毎日行くなってわけじゃないんですが、前よりは行くようになったみたいで。わたしは忙しいけれど、そういう友達ができてよかったですと思っていました」

「祐介です！ いなくなつて、もう三週間もたつんです」

思わず叫んだ。ようやく見つけた。

「家は石巻のはずれのリアスの浜。でも家なんかありません。家に帰るって出ていったもので、生家のあったあたりばかり探してみました」

一息で言った。村田茂くん、というそうだ。祐介も茂くんも被災者だった。クラスみんなはとうの昔に日常を取

り戻したけれど、いまだに異次元の世界から足を引き抜けない。日常そのものみたいな教室に座っていると、場違いなうそ寒さがひしひしと迫ってくる。そういう子供が、やはり自分と同じうそ寒さを抱えている子供を本能的に嗅ぎとった。

「牛を飼っていたんですよ。茂も牛好きで、自分から進んで世話していたんです。でも原発の避難指示でしょ。みんな強引に退去させられました。飼いがいなくなった牛がおなかをすかして舗装道路をふらふら歩いてるのニユースで見えたら、口をきかなくなっちゃってね。人が住まない土地って、荒れるの速いです。山ですから、津波なんて関係ないですよ。地震だって大したことありませんでした。でも家の屋根まで草はボウボウ、置き去りにされた犬や鶏が大通りをフワフワ歩いてる」

仙台近郊の荒浜の海岸は、あるとき逃げ切れなかった人の死骸が二百も三百もころがっていた。

「祐介はどこにいるんでしょう。すぐ迎えに行きます」

興奮して、口の中が乾いた。村田さんの家に行っていないとき、祐介はどこで寝ているのだろう。

「知りませんよ。だけど、いいじゃないですか。そのあたりにはいるんでしょうから」

「そのあたり、たった……そんな無責任な……」

「放っておけばいいんです。わたしは放っておいてます。」

見ただけで住んでいる人の経済状態がわかってしまいうつな、つましいアパートだった。車をアパートの前に止めて、おそるおそる急な階段を登った。

チャイムを押したら、出てきたのは長い髪を垂らした女の子だった。ドアに手をかけたまま、こちらをじろじろ見ている。TシャツにGパン、服装のわりにはおとなしそうな感じだ。

「しおりちゃんね？」

尋ねると、こくんとうなずいた。夕べ村田さんから聞いていた。玄関の端に大きなゴミ袋があって、ビニールの間からカップ麺の空が見えた。

「おかあさん、いないの？」

またうなずく。

「おにいちゃんは？」

しおりちゃんは黙って首を振った。午後の四時ころだった。小学六年生が学校から戻るか戻らないか、微妙な時間帯だ。学校と自分の世界を行き来している子供たちが、境目を飛び越してどこかへ飛んでいってしまう時間帯。しおりちゃんだって、どこかへ飛んでゆく途中かもしれないかった。祐介の叔母だと名乗ったら、眉の間がピクツと痙攣した。祐介を知っているのだ。

「ごめん。叱りに来たわけじゃないのよ。しばらく前にいなくなっちゃって、心配していたの。うちの子だもの。う

放っておくしかありませんから。子供が学校へ行かなくて、学校で喧嘩してきたって、いいじゃありませんか。大人が必死で生きていれば、子供だって必死にならざるを得ない。必死になって学校行かないで、必死になって家出して。子供なんて案外強いものですよ。お宅のお子さんだって、自転車こいで石巻往復してきましたでしょ。無茶だけれどね。そういう無茶できるの、子供だからじゃないですか。どこもかしこも廃墟になってしまいました。死んだ親は戻ってこない、いくら尽くしたって叔母さんは母親にならない。子供の心の中だって廃墟になってる。でも放っておけば、廃墟にも草ははえるし、虫だって集まってくるじゃないですか。それでなくなっちゃって忙しいんですよ、放っておくしかないんです」

村田さんは疲れた声で笑った。半分かすれた、小さな声だったけれど、何となくほっとした。心の中に詰まっていた重苦しさが、ほんの少し引いたような気がした。

翌日、小学生が学校から帰る時間を見はからって、村田さんのアパートへ行った。朝早く駆けつけたかったのだが、好ましくないような気がした。

聞いた住所を頼りにアパートを探した。学区内とはいってもはずれに近い、細い道がやたら入り組んだ狭い路地だ

ちの子がいなくなったら、誰だって心配するでしょう。ずうっと探してたのよ。元気にしてるなら、それでいいの。あちこち探したんだけど見つからなくてね。しおりちゃんのおにいちゃんなら知ってるんじゃないかと思って、来てみたの」

戸を閉められる前に一気に言った。女の子は表情を変えずにこちらをうかがっている。髪が垂れ下がって目が半分しか見えなかった。

「祐介がいるところ、もしかして、しおりちゃん知らないかしら。知っていたら教えて。うちの大事な子なの」

ドアノブに手をかけたまま女の子は何も言わない。ずいぶん長い時間過ぎたような気がした。やがてしおりちゃんはずいぶん、玄関に脱ぎ捨ててあった靴をはいて外に出た。

「おうち」

「え？」

「おうちにいるの」

「そう。おうちって、遠いの？」

しおりちゃんは首を振った。平屋の間に低いアパートがところどころにある郊外だった。今でも付近に畑が多いのは、古くからの近郊農村だったせいだ。田んぼは少なくなっただけで、豆や葉ものを植えた畑があちこちにある。畑を食い潰して住宅が侵入していた。

駐車場の柵の破れ目をくぐったり、崩れた土手を上ったりして、しおりちゃんは黙って歩いた。麻実も黙ってついていった。こぎれいに住みならされた家の間に、スキが数本風に揺れていた。舗装道路の隙間にはネコジャラシがはえていた。

だいぶ歩いたところ、しおりちゃんは立ち止まって顎でしゃくった。

建築資材置き場にも、小さな古い公園にも見えた。工場でも建てるつもりで工事を始めたものの、途中でやめて資材を置きっぱなしにしてあるような小さな広場だ。

敷地の隅にすべり台が残っていて、脚のところにも資材が積まれていた。その資材に腰掛けて、男の子が二人、空を見上げていた。話をするでもなく、何かするでもなく、ただ肩と肩をくっつけて空を見ている。見覚えのある銀色の自転車が進まっていた。

祐介、と呼びかけようとしたが、声が喉の奥に引っかかってうまく出た。二人が腰掛けている資材の近くに、板や石で囲って、人が入れぬくらいの窪みができていた。青いビニールシートで屋根までかけてある。なるほど、「おうち」に見えなくもなかった。

しおりちゃんは麻実のそばを離れて、ゆっくりと二人に近寄った。二人が腰掛けている資材の端が少し空いていた。その空いているところに、黙って腰をおろす。茂くんも祐

介も当たり前前みたいに体を詰めて、しおりちゃんが座れる場所を作った。三人とも何も言わない。

あたりは暗くなり始めていた。曇った空のせいで、午後四時という時間よりもずっと暗かった。ここまでは住宅もきていない。建てかけて途中でやめた土台や、敷地のあちこちに放り出された建築資材が、津波で流された建物の痕みたいな、暗い空にさむざむと浮いている。まだ色付かないセイタカアワダチソウの群れが、風に揺れる。

どこかで波の音がしていた。海面から波が湧いて、リズムを取りながら動いているような規則正しい音だ。聞いているうちにも音はだんだん大きくなって、公園の隅からも壊れたぶんこの下からも聞こえ出した。

いや波の音ではない。草むらで虫が鳴いているのだ。気付いてみると、セイタカアワダチソウはそこいら一面に群れていた。小さな広場の全部がアワダチソウで埋められ、アワダチソウの隙間に資材が置かれている。公園の柵の向こうにも、さらに向こうの荒れた畑にもアワダチソウの群れは続き、群れたアワダチソウのあらゆる根元で、コオロギが鳴いているのだ。

麻実の足元でも鳴いている。足の先から頭に向かって、リーリーと音が駆け上った。虫の声は、またたく間に広場全部を埋めつくした。後ろのアワダチソウがザワザワ立ち上がった気がした。風の吹くままに端の方から頭を

下げ、また起きあがる丈高い草の群れは、迫ってくる黒い水のようにだ。

三人はいま瓦礫に腰掛け、廃墟の中で海を見ているのかもしれない。なんとということもなく涙が出た。近寄ることも声を掛けることもできずに、麻実は三人の子供たちをただじっと見つめた。聖なるものを照らすように、宵の明星がぼうつと空に光っていた。

参考 宮城資料ネット・ニュース

(NPO法人 宮城歴史資料保全ネットワーク)

(「仙台文学」79号より転載)



佐佐木邦子

ささき くにこ

- 1949 仙台市生まれ
宮城教育大学卒
医療事務管理士、塾講師、タウン誌編集、
レストラン経営などを経て、現在は私大非常勤講師
- 82 NHK 仙台放送局ラジオドラマコンクール最優秀賞(シナリオ)
- 85「卵」で第11回中央公論新人賞を受賞(同作品で芥川賞候補)
- 2002 宮城県芸術選奨受賞
仙台文学同人 日本民話の会会員
みやぎ民話の会会員